

潜修

四季草

三

70

1

2

3

4

5

6

7

8

9

80

1

2





掌中蓼太發句集初篇

春之部

歳旦

え日やう所のあも作勢能海  
待却より掃くも見えはけさ乃春  
等捨ぬ松こそよけはさる河硯  
思ふまゝの又を盤かり初めを  
万やや愛八橋年破くお

巻一



又日の風枝とあはれぬは若う代のまを  
じふくもあはれぬのり御とあはれ

初冬也 十日も筆表のころそとく先

人日

摘ませく香しく八色花若菜うな

のふお賞ぬ代ゆりし若菜摘

乳菜如風とまきし川ふたきく

流す尺ともまをを笑ふをの若菜か

子日

は春しくふとむくゆり小松う那

梅

む免咲やこまろこのまあはひも

梅枝城とくもまきくまを入日か

やあうや衣裾ふりて装束衣

社政

梅香や風み百夜の向らう

紅梅や神のうらも雲うら



紅を縁ちまゝく梅のよ不巴り

学

うらひまきのぬつ縁りく初春

学 ぬつそまふくあらまけり

老学巢

瑞居くく学よ顔見まへん

学よまきよくあらくね折くく

柳

二万三万影吹入はやぬさう那

ゆりかき水枝もまき柳うま

此庭へ能く這入く屋かまき

柳のくく柳不くいとあまひり

橋ふくく踏くまのくく柳は

震

洛陽能く初節さまきりまき

うすませて子やおのふらん



音韻

飛ぶのし先進くま ねくすく  
まふらふく

夕霞ふくく 鼓ふくく 雁ふく

春月

ふく丈 蹴渡る 月 秋く 那  
折ふくく の 樹も 春く 月  
麻も 春く 樹く 蹴る 春 良 月

猫意

秋ふく 秋 半も 春へし 終この意  
濡たく 春 春とく 春よ 猫の意

波意

波 春や 倒くく 春 春 日 山  
波 春の 降 春く 春 春の 意

春風

春風や 一度 春 起る 春の 春



春雨

雪のぬれと啼たり 春の面  
双六と返も喜有りともあり 面  
喜面や括るものふへ 羨も有り

大井ふり

三井寺に鐘きく 春の面 款六

陽空

陽空に梯よせてある 層火うな

濱松犀岨

岩角千塊くくけく 桂う那

風中

きれ几巾丹をある 次平のゆふ

海苔

喜海苔とくけて 白し磯の波

花根

臨婆初く人城笑ふ花をく 福山



雛子

綿木よその尾まゝる糸維の糸  
糸志ほる信解の糸あふり

涅槃

糸もん金もあふれて初より飛た蝶

葉

とらふかゝ化しそく虎の燕と

雲雀

初風やきく一まらよわけ雲雀  
とらふかゝ化しそく虎の燕と

雀子

まら子や余多ふ蝶を退まら

蝶

蝶くや乞食の養れうのりき  
はまむらと砂味暗を逝る故蝶

蛭



似憐の抱はるるや鳴かざる  
後室の表く白あえる蛙うれ

董野のま

そとくひく牛もあつらへ董草

春屋

喜此日や門申く梵籥の新法は

八橋

秋まろく春やむらゝの傍よりら

大磯

狛成り燈々一喜の表めりか

苗代

秋風孤二多ふ小室く一苗代田

雛

枇杷白髪の雛もあつたねし

消く家燈もなほあつたねの雛

豆餅



きしち膚も女ちうけし草花餅  
下草の穂よこまれば遠もち

汐子

ぬり走る女ち縁の汐干糸

出代

出うらまや 伊丹へまきく大男

花

おきくとおせさく花のつる

是れふらふら花の陰

身ふらふら花の面杖う那

芝居皆やまむても花盛

芳野

志く雲やちる時花のよう

禁よ屋とら

めつらふら芳野と下りて花一本

花吟ふ新も乃ほまねよりの川



芳野大游

ちる花とめつめて流のそとを

苔清水

苔清水花うさうけて結ひり

初歌

ひう雅被るもてや孝の花

様

世の中と三日見ぬ万み様うま

我宿の様とすれてう〜り

割あまる秋の介とさう〜り

来さるや又奥よせん様かり

志ま〜く芳野の山中よとま〜り

比名ありあ〜の花即〜り阿はめき

ま〜りの河友のり〜り又ま〜り

ひ〜り〜り〜り〜り様う那

岩り〜り〜り〜り様う那

う〜り〜り〜り〜り〜り



年高きもよきもあひや 山はく

海棠

海棠やあはれも来てもよきさあは  
海とくや花の中よりさうすあは

躑躅

旅籠屋の夕ぐれあふはし

若報

若報の緒 夕ぐれの日 朝日ぐれ

あふくそ 弱のひまの 小報ぐれ

友

投うけくたのむ色 ちり 松平友

まされえやうこ 甲とさうし 友の花

行春

夕雲花 落るや 春のさきよりより

伊しきまや さらし 渡ふ 熊田の橋

あま 春の 笠 きて けいこ 申く



夏之部

更衣

袴部より出ぬるき一更衣  
我より後ぬるきよりせむき  
武士跡矣とせよきく捨るれ

白重

きききききききききききき  
白くさぬ少くさ脊中より相かへん

郭公系小て 嵐山小く

若くさめきききききききき  
二のききききききききききき

箱根

雲礫くさ日もきききききき  
かききききききききききき  
きききききききききききき  
かききききききききききき



かゝるきみ果と蹴落して出らる  
一とせふさつのもんやほゆくき  
木唱して又おもしろくはす  
世と路もたふ位も乃そ海は郭と

灌佛

山寺やみ色よあまる花の堂

牡丹

月と影と河に影と牡丹のほろり  
様らる果や不めん乃雪丸け  
花をよこぬ不しぬ牡丹うま

葵祭

あふ傍る木のそとそを流るる

嬰粟

あけけしと續くくめあき月秋が

麦秋

乞食せん世をわらう身をもこり麦



旅孫としてるや、麦も秋の香

麦の穂も出揃ふ卯月八日

筍 糎

牛の子や、花ちるさとの男

くれあふと花ふとさしし初

鄭

洲よふう宿りしと花と秋

津のふら伯母よとるに鄭の歴

花柚

惟光とふまへと子花柚

下園

下園よ乾ぬ開物とる

牙延

は山の茂や妙忠一字より

宇津山

若ふたやとて截るあけり



菴荏

水鷄

翡翠

うしきつや濁きし 次ノ花々々  
日やけ田よ水門たぐく 水雞於  
屋とりきさの花ふと 蓮ノ翡翠あは

新茶 柵の尾

唐古のさひしき見せし新茶は  
とろろく洛よありく

暖嶺の葉折焚字活の新茶は

采呼号

我母おまごさうりさうらんこ色  
竹まきー木まきー部さうらんこ色

螢

うしろうろく 物さーま虫の螢うれ  
追まこくハ月さうろく 不さゆは  
端午 露波けみさ

懺身の果とありり 帆然船



百煉瀆

煉くけく 鏡若りり 又日月

競馬

斐斐兼越の浪小落りんらるる魚る

又抄の石をみるく

えてのこやいさ 惟ふよふのふすり

又月雨

又月ぬやわら 秋正とらよ 雲の月

秋のせめく ねくも 飛よりり ありしぬ

川越る日もあちし 又 皋月ぬぬ

冬初川を停勢 徳野の二津もくめい  
まらんえたさふあしや 又 小森ぬぬの夕  
晴もうれし

紀の月小冬初川や 皋月ぬぬ

田植 佐言は田

乳ちお柱おは田の乙女つとくくより川  
休の冬せのうらとちるもあうらうこま  
ぬちしきくぬや

種苗やりん 残るこまの志くく



二尺橋のふりより二層を踏し山岳其  
上田之及味崎八斗小共部よりよあ  
よあ所とある様師のねををひひ出  
そこ小高嶽の名なりたうりれ

玉苗所門田持けりいくよ餅

山陰や人目ありそと 田うへう

田原

山部より脊中ふきり田原を

抱いぬ夫婦たうりり田原を

美井 鶴舟

とらうかうはうそと 藤ふ今逢井

鶴流ういやま子よ像子ふ田川と

つのも鶴やまをそと 鶴も木のま

敷巻 紙巻

まうしとまの藤ぬ里の敷甲う

敷巻火やううはしうも 松の月

紙王寺



尼寺や粉白粉も蚊取り草

多所

蚊の居ぬも浮世の外そ松の月

我度々紙牘よせよ云々

業平の知く居くも紙牘くれ

其夏

菊能る思業の糸や美人妻

高のそくそくや葵の又六月

花うらとと

里人よきんらさとも花うらと

小次中山

雲陽花や襟身片らあハうら

紀州親あし

荒後や梅子あし親あし

秦徐福古墳

梅子の唐とやあしと水塚のぬ

氷室 紙筆會



六月新水もさくさくこころ那  
紙を舎や糸を日かきの下どり

竹婦人 簞 蚕

まをふよりあひひをあらり作し婦人  
曉を小町うねねや中下婦人  
狗鬣は風をそよまされまらひり  
客婦りふん送る雲の川東女

園庭 扇

友のふふうちこきふや小形城  
極つけの田つらんまき園庭  
庭圃の跡を扇かめ  
いそけかき子よとれくる扇を

清水 花柳

初とまらひ腸流し流あう那

自得

晒えくさを措きり月日う那



暑 西海

夏月

龍虎蹴るもあつそめて暑う那  
野山より市のものなり 夏の月

沖鯨 鯨 雲峯 夕立

飛人の凱陣よりそ 沖まきに  
鯨賣子阿字とやゆらる耳もうま  
乃海もかといつて日あり雲の家  
夕立やね合傘を晴くく

網涼

岩はくふつとや夕まきえん  
涼しきや寺と基石おきまらり  
木使子落葉吹やちりゆかまら

糸奈川谷

夕立後入暮る帆あり夕すそ

白隠法師相見 籠花も

涼しきや富士と和尚と田子お浦  
まのあつらぬりと富士と海も涼し



下紐

下紐の園を伝ふ也 申ふ事らん

麻竹の田家よりて

牛馬のあつてもあつぬ夕

口糸の糸

風涼し扇の立ぬる涼風よを

不忘山

かゝる日もるるよとされしの山涼し

涼後

人きく縁見えたり涼後川

秋之部

立秋

一葉

秋の山や一ひらぬ秋

虫の音れ下崩安やと秋乃縁

忘るは秋の山秋をくう那

暦はと音しとく相の一葉ふるな

系ききてて秋もふるや相の秋

七夕



明やすき墓葬はまゝん 星 却る秋  
鶴や櫓 一のやうにてとせつりし

仙府のんくうりてりれ

長居一と星の一 秋よまゝのまゝん  
七種や葛ふらうりて 秋のや

秋原

墓や秋と秋くう 何れあり

我のよふ秋とまゝ 女帝花

まゝるち

まゝの井や石を子孫よ志のよきと

墓の花嵐ののちをさうりうれ

淋一さの秋くうれ 家すくたうな

うまゝあるもかくてふさひ一 鳥 瓜

魂糸 燈籠 躍

世の中や朝もくさくは玉まうり

人のせくあともりはく玉まうり

秋くう 秋あり 燈籠



燈篝や子をとりて風の花  
秋風や人まのふりく躍る那  
飛く耳旅人馬をたどりて

稻妻 蚤 鳴子 添ぬ

稲つまや園を渡りて不破の雲  
いふつまや桂の秋夜のかきくま  
刈跡の落よまらるいふこり船  
活く居る身のくくくや鳴子引

秋風のをを切ると添ぬる那  
舟細ういふく減して添ぬる

稲 後府竹林精舎  
いふくろ稻をよ花より又器一を

紫陽花と又器よ盛るをよ  
よの二を又母うし

刈のく丸回つても焼く又器一を  
虫

十をうり耳ある秋なり虫乃急  
虫のきやる即ちけきと



冬瓜の傷き河原 秋の聲  
調や蝶を浅き水に

秋風

秋風やうらそあそひ一葉より

秋風や 行羽野ふ 胡蝶う那

茶文畧

山をむえ川あうれあり 秋のうそ

知春あそひ庭前別

名より川ゆりあうれそ 素乾あそひ

跡はるりあそひと おぬ 秋のうそ

秋浦吟

秋風や 霞もあひくもれまき

必親る人の深草よ 春日の残葉と忘れ物

于そあそひ 體よりあそひ 秋乃かあ

秋柳 花野 秋夜 森

いそりや 柳ひさしきり 柳

あそひ 柳よめりあそひ 花野

合款の本紙 柳あそひ 老の秋



白露の果をありり六玉川

秋菘 蕎麦花 蔓椒 瓢柿

乃向を一里くくと秋のらん  
隣はさよのゆも思えて秋の菘  
蝶々の目ふも後液や蕎麦花  
似珠の楽をおそろしことうじ  
ううくくともさか花のつるふくへか  
お荒く耐めく柿の木末くれ

鷹 小鳥 待宵

初丁や水車と落葉あめりへ  
初よとりの二羽まきぬ庭もさ  
あしきくはうそふせすや百千雀  
下総浦片とひ二る

朝風や小菘のさゆりまをほくし  
鶺鴒や潮来ぞへて思はくま  
うら秋もささは葉且温泉の山よりと送る  
月影時そちく向ふそあらしむけ



月と出くおふ時山の入取引  
名月出さうして照る岩間あ  
むと山と六あのをぬおとりの月  
名月や葉を鳥を落もよもすう  
名月や波濤まきとさうもさ  
名月や終らうも見えたりおふ  
傍ら多うく八百をの門や乃かの月

十と米やあういハ園の楷やうく  
さ川沙や竹の裏引人乃参

種分 約逆 相撲 衆を

金屏よぬ吹りりく 種りけり  
旅人のうに抜るや 約むく  
約牽や日中けり 甲斐の黒おのこ  
大肉お州とち産や 相撲とる  
名月とや 衆をさる 角力とる



女月と揺る竹のりりり  
半分のまきさき草火の  
竹葉のく枝焚の秋をうれ

菊

昔々くくもささきさき  
そのいそは客と真まま  
秋城の松をきくや菊は  
あのを海よりうらるる

木曾路

秋ころく組又める菊の山

後月 菊妻 草 く粘

若くは菊のあやや十三夜  
願はくぬら丹野あり後の

金沢まで

隈くま海士の焚火や十三夜  
菊 菊妻とくそく益の若め  
新 新くまをきく粘る持の音



茸物や月の干潟の小松を  
うら枯や迎ぬあまた丸木橋  
うら枯や月の夜よりも星のあは

紅葉 庭

九月廿五日 舟山のあきうれ  
掃きも雪へくさくさ夕な家  
秋落くくはそくき葉のぬ葉か  
是よりくくく年波よせる庭うれ

夏野氏の巻 眺橋うら

もさほーき長月比花火うれ

麻 新酒 濁酒 落水 九月廿

麻 新酒や子酒よおろそまの川

山紫と子粒の候ふ物

新酒あり鴉の雛の雨とせん  
隈あさせのくむおれふらう海  
帆のうらふまの舟あけり落し水  
秋風とまうらーの出帆入帆



冬之部

初冬 時雨

初冬始 撥耳入とや さらさら  
桂ありし 松よあけや 初しとん  
秋風と 義耳のころと 初時返  
色久ぬ 義あまの 初時返  
雪のまささうし けりしとん

小春 十夜 口切

山と今 樵吏の 笑ふ 小春う那  
河にさる 目まきとく 初とく 小春う那  
我々のと 娘女とく 小春う那  
口切や 苔と 價小 磨あくと

落葉 枯柳 冬牡丹 枯柳 鶯鶯 冬牡丹

又春の 春あくとく 小春う那  
枯柳 鶯鶯 飯ふけよとん  
富りとく 春あくとく 冬牡丹



牛の尾張弁をうこうぬ指那うる

夕ぐれの藻のそら死やとそらうる

灰占年先何結んぬ也まあり

帰花 巨魁 用 水仙 歌巾 紙子 袋

あつてきる地まの事の方をゆり死

程あつて次子たまやうのこころ

長居して巨魁も園よるる表

まうしや彫田外まの八舟部と

河舟の名うた流次 あり仙死

きう接とま羽羽と次巾うれ

傾城の市やううれて既巾うた

客の半日の果せたまはる半日の果せたま

客の来とて我小喜わる紙子うれ

老翁の集

戸うぬと我錦わうり紙子うた

菜大根を種見とて老を平ありん

細代書 暖書 教見せ 繁蓮



世より事のものつきく年綱代えれ  
所こそぬらもあつきぬらあとし  
つる耐き一えんさきやぬく免る  
顔見せやぬ粉白粉も菊のあ  
髪さきや部と死さける肩の厚ま  
象形水はらゝ炭措火水多  
減立の門多くさうり萩の萩  
障子うらうらあもやを所水

一糸しとハ入日乃水推り那  
又る衆や炭もて炭せうそくさ  
あこの火や萩ははらゝ老ひしを

水多 鶉

鶉さきあらしうりや習の右むら  
子多啼衆や名月あ照のし  
友見えて月衆の獨焼く以萩  
吹上り伊らりめちうりか



雪 碎扣

とめひて見れそ風あり秋の雪を  
降らさそ雪よおまやあくらほ  
まてけ 雪おろくや雪のま  
雪折川 雪の掉さす小舟の  
白雪の中は折よのま 雪おろく  
はの雪 雪さくしてまの雪  
降た、き月秋ら見えて雪あがり

縁掃

とせの縁の掃きぬかりし掃田  
ちく居ぞうのしき

神のまは義もゆきまき 拂

年内之春

夜半よらむ 年とせれ井のけう家

治く年安さる志のひまよむり  
持えさるまのり

云 猿と虎の山おまやどくのらま

我弟のたの家の時よりくまて麋鹿の  
捨ひとまの猫よりくま

金銀のまより 抱く月を 師まら



津破利の津より川を師乞は

節分豆まき 宝歌

鬼ハ介月を因へともる想は

厄掛跡をうはるき月夜は

きりり松嵐はあまぬ一乃成

けしきをうらみふやとふり脱るこころ  
さすうふもなうい放るこころ

風鈴ときく時やこれ名跡は

掌中夢太發句集二篇

春之部

歳旦

初鶺也又市上は甲斐玄と川の

美水や舞る花時乃人より強

と船の春鶺のこぼれとん付と重

舞極のそら形をてくびしこりかきのみよ  
初とれと觸雲のうらみよ花のあけ  
かのをまてしころ







咲くは梅とわくくの日教ふれ  
待ふ縁なき和歌よ白き梅花  
之弦も接穂時をうむるの意  
香系は心く出さるるの梅花  
梅の多しおよふぬおを梅

外籠梅

道くもけ末遠くやむる結花

鶯

うらみすや月の星のと日おえ  
鶯の初聲さらばを何言う那

春眠

鶯の弁子戸ぬぬう那

柳

むいりてをよそをなす柳が  
ま柳やうしく老のつほさうり  
いろちたそをうさう柳う那



縁をらまうと書きうぬまに

お町く川市ふあひまる柳か

年辰新縁

馬借くかま体くよくまをり

大井川

落馬るや辰もあへは大井川

大和初御田別

うしろみもあもをささ辰くま

春日

南く出さのもあへはおほろ月

駿河の玉より御一は辰女の参り

なる不精一

ふさといふもあへは春の月

雲の月様ひと枝をるひあり

猫意

我屋の老猫またをふれ

鏡又くいさおひされ猫の意



おのひ森の尾よ蛇もくらの猫の姿

白魚 習帆樓

白魚やそれとある火の凄くは  
あゝ魚や波まけの舟のなちう

名解

名解やううくは百八十ち

余を

部このまはれうま乃をうさか

春風

誰とあう待伽頭ちうむ春の風

書面

秋の影結傘へあまうや書乃返

春のやあうつさんまを松の電

も原の返祝よ清く返名うん

鳳巾

きん巾の夕越ゆくやまのち山



海苔

竹比乃乾夕やまゝ一海苔二枚

仲春

松栢と等て正月二月う那

神事一の乾を不うけの二月式

紅絹裏のうつきをぬるむ水田か

等於山

等於山とび久と山乃笑ひたり

雛子

阿茶るのや極とふま雛子の乾

たやふふあふさ雛のはるさ

雪云雀

秋もすうさふ飛さうといえり

菜の急よ落さくまうさ雪云雀

蝶

極木原の急さく引さる於蝶



うしろの町をふらふ川下は花の地

蛙

はらふまふらふと物まを陸の那

亭子煙のあふらふと時らふら

のふらふとあふらふと陸の乳

富士根方少く

畑うらや大坂内う丸くくこの

草

人ふらぬ物らうのり甘うま

池田の宿少く

先申の徳州の摘く草うと

菜花

菜の花よりけさ大和の内水

炉塞

炉ふらふら二日けらぬらう

雑



三の四の細も雛の月秋八  
はれくと月忍くまにの雛

胡葱

胡葱や小冊の小所ら物あのみ  
わさつとやさう造ても 女文字

桃

桃咲や牛のうらもやまこあ

出代

おらりや飛鳥井藤く 檜町

花

長宗とくおとそあま花さうと  
花散るに水さ日とあまりり  
このそかり花よさうむおの言  
成佛の権りらんまなけり

东叡山

そそきや世ふまどまて花切手



洛陽

余一首のぬ山ち〜花の香  
傘さ〜〜加る〜花のみやこ  
旧歌

深美え政古墳  
月尔花尔法の杖あり竹とめと

梅

ちる梅祿ちよる人み梅と花  
梅惜む老よふよとやちる梅  
未さ〜〜三味線深〜人通

美山居

梅戸や梅まつけぬ梅  
日暮てはちものちのち山さ  
子蕨張肌をち〜方そち梅  
りよえり若よは〜し花は〜ら



麻原の如月六日家と共ひりる時

ちり果くく方宅と申さう 秋 橋

鄭濁 麻修ふく

縁の代は夜て月とさる 清く一と

若 鮎

若鮎の小あ方きくく 迹より

山 吹

山吹や旭起まうり 曇てゆく

山吹や月も影くく 沈めゆく

友

山寺や一日あらけ 秋はくし

仍 春

仍春や一花うまきよまらる

復之部

更衣 鳥群と落ぬは枝と雲く

いさ嗔娥も如くくまらるれ 衣うえ



財無忘は随く一老婆ありよく来  
てう句を守徳山の持ふをまゝめくその  
涼切ちうりり 軍十余里の勞を忘る

先門の焼子用ありこゝもいへ

若松

高啼く志川ふらる 若松

郭公

えぬ喜とこくれ歩けぬがす

是くふ高の思や何とまき

郭公一老の復をささ免けり

耳をまきけし牡丹よ郭公

釣く糸懶く出くりやとまき

竹杪く藤くさふや何とまき

鳥歌よ高まきまきり 郭公

牡丹

明和九年四月廿八日赤川芭蕉庵  
再真成徳の日吏宅翁十七回忌を  
まひこころ

死こころ牡丹を蓮のうて船



白雪の空を南りまゝく不らんか  
多きまゝうゝてさ 桐は牡丹の

青簾

瓜の皮と皮のまゝめや書すれ

杜若

何より冠り美せんかさのまゝ  
樹越り後ハあゝと かき片ま

茄子

継

一富士の隠るゝうやうの茄子

面白き書なき 書や初から

笋

笋をゆり出ま竹のあじし

休の子やあふ小布をて亭を

鄭

大後

鄭より乳あまぬもうれし虎の衣

いとほしと是よりいりんすしの飯



花柳 葛波山人の落しおのむくと送る  
柳の花やまき場く乃待百篇

或人の男のりふ女のまてる貝ふらふて  
はくろくさる魚の形々さあう柳あり  
小舟こいさおし船付ける是よ然と元れて

二層この花柳も燃し一層お舟  
一枝とゆゑひるさる花柳くれ

実様

実ころくさるおと頼りまき岩舟山

下園 忍塚

素子さへ歯音おそろく木下雪

和分浦

續り初る家ふの茂たし初分浦

後醍醐帝御廟

百官おきく候とて其木立

花菫

水鶏

翡翠

隠家と市とそらけもきさうくし



菰の奥と直ちと水鶏式  
蓮の唇と蓮の抱とぬ翡翠式  
川蟬の風とゆるりとあひひり

後河村あしわりらるは子来子う若の湯  
の舎と書つれらるる糸の一真わり

三橋うらと花ふいふ川苔結をれ  
穂と平温らぬの古及や苔結花

相花

酒桶の脊中不も思や相乃花

螢

松ふも小雲の末はむほとふれ  
傘さして螢結をせ宵秋うれ  
冥の煙乃平と川うとぬ螢式

端午系

不とく耐我ふはまよと粽うれ  
宵せると女まよもまを兜う那

五月雨



竹即ち川虫おぼへたりありあり  
出さるるや體穢しさらるる草の音  
櫓を漏るる音暗し臯月白

田極

招ふ日をうらむ出し方田極外  
をを里や二筋さすち田うへか  
即ちうしと月より淋し田極笠

青田 高麻深ち

冬田とて青田小集し去るるの系  
ま田とてし深寺張在即ち

田草 若竹

秋の来るる法をうらむ田草とて  
それ子競それふらうとて若竹  
出さるる時しとて之ことし竹

鶉鳥 照射 白兔牙

鶉つらひや鶉くねひ於小舟



新も鶴舟成りてささく鶴烟は  
祐成り何る秋恋せぬ照射くれ  
時致る山やまをたれてこりし船

牧を

隈おほき書きく見よは浅般甲りか  
蚊甲りしと後秋くし里の月秋か

白骨親

夏瘦のころりひささる孫えくれ

夏草

庚辰の暮秋をうらむひて誓  
南無更仙が別荘ありけるは

杖さきくささけ這まは庭とりか  
登る海や都より撰くふくさく  
初らうやたさくむきふ波の音  
夏草やゆらぐ笑く恋あくる  
夕うねや空を走の目少は即菩提

藻花 瓜

藻の空や際あさ水の中をうら



もくはあそ風むく新のかけりも  
瓜畑やいさむとくともまら

氷室 祇園舎

六月を横手 初冬も氷室より  
祇園舎や人をゆる煙の落衣

富士指 白河関

去来路宿所 浴衣や富士より  
斤神と秋の風なり ありあそ

竹婦人

蓬生や子ぬふ 然と竹婦人  
七符とも三符ともいふは竹婦人

團扇漬

おのころのうらやとれを月  
曇る新たより 後の巻を

このまゝかたしふ 似たり白團扇  
清み 清より 東武平ありむくと

我新ふん何ふ 園の清水うれ  
涼— 六子初なるしりき 昔清水



家あり川中不流く流るる舟  
山依の波舟しそけ流るる舟

暑 市中

三味線いろうのせうあけ

天津路年丹路する暑さうね

かゝる不指れて珠指ふむかゝる不憐と屈  
してはる三味線音未まされとも枕をさる  
我々の夕アるふやまをさそおのひおふと

帷子やぬけを風ゆ川相なる

貞徳翁旧跡多相日相寺

復陰やちとれ傘のあぬるり

悼吏登翁

六月を經帷子下名跡くれ

一周忌画像右

秋すくぬ人のぬけを泣日うと

三也忌

仰人もちう六月の紙子うね

石碑造立

三伏の夏あき石の虜の那



蓮 夕立

菅笠の類く蓮のうきとてあはれ  
丹こもるハ糸とそまけり蓮の花  
申ふところや地ハまき田の藻をばく

納涼

血部と川水よくく納涼り  
町の燈籠おとく橋や夕まき  
足代子候技のあしぬすもくれ

本神宮法樂

信濃郡とてま井とあるはす  
平流川の流と流るおれり

我影も鏡りりれく本涼一

ぬくひ武隈の松ふりりり

赤老も松のおりむ下まきみ

河原

白鷺よ一鳥帽子蒸せもや河原川

秋之

立秋

流ゆく茅の橋よあきけさの秋



終るともく 穢しもきやけさ此秋  
つけねのまきまふり一葉あられ

七夕 八日星

早より琴のしらき 文り端在り  
宵月や 素娥舟のこくくまて

星は川の東流の異忘りて 隅田川は  
舟とさし

星途 一雪舟橋けよこやこ名  
立琴も存せりや 早の二日 碎

秋草

あさくぬや 秋まろく のや部とく  
姨捨もよろむひあてり 女昂花  
荒牧此中 年瘦りまきまへ

阿房宮賦をよむ

鬼灯や 三子人乃 秋乃と名  
招風紙 直る根よめる 落う那

魏紫 燈籠

月乃れえ人の 秋たりままろり



亡沙の新美をむく

迎火やふらひふまをぬりの新  
は客へ懐はくもさそ又浦の  
燈籠の中うさひー揚燈籠

稻 蝻 鳴子

夕風や毛鷲もとうに稲むら

奥州野田玉川

追まてく蝻 見を川子色  
引めけく松の月夜や鳴子繩

安山子 河内路をさるる

楠のとういさやせうはうらま  
人先よやめあのさ系安山子うね

秋蠅 秋蝶 蜻蛉

飯をまを遠く来るなり秋の蠅  
乃小見まをやめああるぬ秋のさ  
等階て去りさまのや わさ秋蝶  
うらうらあの日あうおさへて蜻蛉



虫 秀

日暮きても 蝉を 綿ちり 虫の声  
 眼を明を 蓋森 ちり ちりの ちり  
 我 秋の 悔り ちり ちり ちり ちり  
 ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
 人 ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
 是 来 ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
 秋 秀 ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
秋一まきて

秋風 花野

秋風や 人 ちり ちり ちり ちり  
 秋の 風 花 野 ちり ちり ちり ちり  
 追 剥 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

秋夜 須戸 露

宿 借 ちり ちり ちり ちり ちり ちり

後 傍 湖 水

秋の 水 ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
あつ人 ちり ちり ちり ちり



喰くある七玉川や鮎秋

上総子種溪

志く波の深くあり侍や子らきと

農家は八十の老を笑しき

葉の秋粹あり何ける翁の那

秋暮 遊見坂

舟くく海とけ見えに秋のうれ

暮とく川敷見合せき秋の暮

眠我と暮水はたけ

木母ちと力ありりり秋暮られ

象居城客とまじり秋の暮

白帆樓

移りし帰帆あり秋の暮

高松毛織寺懐古

變紙かきへりり秋のうれ

馬 小鳥

二羽くとうきて悲し居るもの

初層や平初よをき月の色



連花や即ちりあさる 松乃中

野花来り一荒見ゆは 野山うま

文殊き納

山首や文殊の習惠のむらさき

茂原山

茂原山の眠さすすをささるる

芭蕉 柿 待宵

ささりささるる 稽鶴ささるる

深うねる我と引ささるる

濃柿や代々のあも 撰柿し

待宵やささるる 女帝さ

良秋 二洲橋を撥石列莊十六秋

あさささるる 枝の結や乃月

田舎まわすいて

浮雲舟鳴子即ちるや乃月

徐川舟道遙

川よとせ川よ月の花とる 秋の

十人の月見の友や松即ちり



藤原

管ふのちと神代の宿丹月見哉  
 夜丹や何はくきもはくく白  
 夕月や物うつさくさくおへり  
 夕月や生れかろくも暮れ松  
 夜月や月より初より夜もほし  
 危峰くく深村の松乃月暮り  
 夕月や焼せけを風もあつらふを  
 一谷

夕月よりの雲暮る波や汐戸の月  
 いさよひや園うくあまの藤の夢  
 野分 相撲 秋夕 新綿  
 岩端の鶴吹を西川 龍分哉  
 夕月り子や見る目のあまの相撲とを  
 眠江亭  
 夕月くく酒のそびふ 秋夕くく  
 里を今綿あつらふく日初哉  
 葉



白菊や花のこぼれと菊の葉下  
蝶をよの菊をうらみ入日知うれ  
ひとまふと菊をうらみゆきくつ六せ  
吾もよの菊をうらみゆきくつ六せ

漢村を湯

魚の名も菊色とちよのうらみ

婆心公あき

あきく菊やあきく結花よきき結

白さうも浮世の暮れや菊のあせ

後月 尾越鴨

白魚結のぬこころくやのち乃月  
稲穂きり星よはけうち乃月  
尾を越えぬいそく鴨のあき

紅葉 尾

人あきのぬこころくやのち乃月

流防秋実

花よりも紅葉よふこころ 流う那  
あきのあき紅葉よふこころ

流防秋実

廿六



春とりさあり

春とるまきや幹をり花籠り初紅糸  
目小かく春月の裾や小秋きぬる  
轉さうふあやうな乃拍子うれ

あさひらの雲あがりりりりて

秋嵐や翌日秋味晴も梢より

登りけく秋味晴のうらうらとて

麻 落水 九月

冬はあらの糸ととそきけ麻の夢

綿さく秋甲く秋を晴るる

冬之部

初時雨 小春

市仲る菊葉深くとるれ

夜庭

傘たむきよとそとれ初時雨

とれぬえとれ初の時葉はる時雨

秋とさうと我は聲ゆる時雨



祖師さまの忌日くを小まき外  
糸を踏まふちりく踏む小春外

後河の人とよまふ時

身まのの震ちるまじりく小まき風

芭蕉忌 百回忌と十年の今日小まきひたして  
津川安守ちよは財源造の折るまじりく

人のまのたよて我死んと係せまじりく  
あつひまき

我師よ小まきのちよ 十一日

後河橋やま無稿も糸の白ひちりり

桃舟亭より真りあつひ

ませ我忌や飯とゆりりの茶と深人

掛川より端の布とまひまき

冬枯や人あ葛糸若士あつひも

新冬

まひちの眼ちりり方や石落の花

十月のあつひまきや花もまき

ちくまて罪ちよと菴の干菜まき

枯柳冬牡丹枯花 鶺鴒 冬菴

枯く月を柳の浅秋う那



妾ぞくは栄枯のそと戸や冬月さん  
 三と月さん一里ハありさう枯野さう  
 えぬあうよ物拾いせんみ我さうか  
 おうひうひて月さん出さう冬筆  
 帰死 火桶 巨魁 とうじ 瑠璃  
 妻ぬとありふ目もあり 為日花  
 ちあよ初さうさうも白ー 帰死  
 こゝれ居る官女の中よ火桶さ

極楽のそとへ あまこ こところのそ  
 風やこころし 禁さくあめさくは  
 子鳥鳴うーう月夜の路中うさ  
 羽二重の系よ 蟻蹴あさ紙衣  
 熱き 氷 炭 積火 水鳥  
 顔んせや惟よ 壺寺此鐘のそ  
 檜ちへ檜さうりりて 兼秋さ  
 鴨さー 秋木のあ いはこやて



賣よりも買人きく一炭二銭

身延七面山にて

櫓の火や祖師の胡座も眼詰あて  
まゝ一羽離るもさくめ秋鴨の飛

千鳥

押分て月こそゆれむらうと  
こをあらもちるおゆもて濁うれ  
蛤耳もさくさくとふとんか  
うこくたう居れをこぼるむらう濁

雪途中吟 辞扣

ころろある火よあさうり秋の雪  
島布と八百屋さうまや夜の雪  
簾揺るむさうり薄き雪の友  
まのうきき飯らふ雪のちり

修の對也

掃よせん君いさほくまを連た  
習りふとふりかおもめり新うき

辰記 四 春



と年ありて裁をいふ年ありて衣 砒り

年内三春

みくらとともまふとともいふ柳か

年忘渡ある旅のふれあるより

年内三春の日はまはるるのふれあるより

春の日をかりて抱ふやとともまふ

まはるるを

かくて世を離れくるたより年の昔

年波の後とはまをいふあつてけ

起されくすんれそ粟蕪解をい

酒肆ハ解といふぬちく系解ハ解より

あつてけと解をいふぬちく系解ハ解より

鼓屋と浮世かうとむらうのくれ

節分 宝弘

大豆売よ七歩の吟や屋をい

あつてけと解をいふぬちく系解ハ解より

中の素のありけをいふぬちく系解ハ解より

夜寝屋をいふぬちく系解ハ解より

義堂より 屋の振とよめうと船



三芳野に旅寐しむ花の衣の下臥せ  
妹山脊山の侍もまよわたりまこゝろを  
榎木と急し〜こゝろや古〜

基依の風流せ〜る美媛の若く提す  
とらりま

質よとく物なり〜月あり年結る

東方未明衣裳轉倒

祐成る蝶若く出〜り子のえ



